

世界とともに

活動場所：6年2組教室

10月23日（金）9：20～10：25

提案者 平井 恵理

1 活動のねらい

自国や他国の文化を体験することを通して、文化のとらえをひろげたり、くらしの中にある多様な価値観に気付いたりしながら、他者と共によりよく生きる自分をつくる。

2 なぜ「世界とともに」なのか

外国人労働者や日本に移住する外国人は年々増加の一途を辿っている。子どもは、ルーツとなっている国もちがう、信じる宗教もちがう、思想もちがうといった多様な価値観をもつ人と共に社会をつくっていくことになるだろう。また、膨大な情報が溢れる情報化社会の中で生きる子どもは、他国や他国の人に対して、メディアを通してつくられた漠然としたイメージをもっている。その漠然としたイメージが先行してしまい、偏見につながっては、他者とよりよく生きることなどできるはずがない。多様な価値観をもつ人と、共に生きやすい社会をつくっていくためには、まずは他者を知ろうとすることが肝要である。実際に会って、言葉を交わしてその人のことを知り、ひいてはその人の国のことを知っていくのである。

本活動では、他国の人とのかかわりを年間通してつくっていく。子どもは、自国や他国の文化を体験しながら、多様な価値観にふれ、他者と共によりよく生きていくことについて思考しながら、自分をつくり変えていく。

3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

○人とのかかわり、くらしを見つめる

他国の人に日本のことを知ってもらいたいと願った子どもは、自分のくらしを見つめ始め、自分の国についてもっと知りたいと願うようになるだろう。また、他国の人とのかかわりを通して、自分のくらしには他国から入ってきたものやことが多いことに気付く。身近なくらしから、文化を見つめていく子どもは、未来に残されていくものや、失われつつあるものについて思考していく。

○他国の人とのかかわる場をつくり出す

子どもは、他国の方との出会いを思い描いて、場をつくり出していく。自分のくらしを見つめ直し、日本が感じられるものやことを他国の方と共有したいと願い、場をつくるのである。そして、他国の人とのかかわりを通して、その人の国のこと、大切にしていることを感じていく。さらに、子どもは、メディアを通して無意識的につくられた国に対する先入観を見つめ直し、国のとらえをつくり変えていく。

4 対象とのかかわる子ども

5月の下旬。日本において古来より神事に使われていた切り絵に取り組んだ子ども。切り絵をつくることを通して、日本のものやことは何があるのかという視点で自分のくらしを見つめ始めた。

6月、中国出身の周さん、台湾出身の洪さん、ドイツ出身のヤニックさん、コスタリカ出身のマリアさんと出会った子どもは、他国の人に日本のことを知ってもらいたいと願い、自分の経験から、日本が感じられるものやことを探し始めた。そして、琴の演奏や折り紙の花束、福笑いや坊主めくりといった一緒に楽しめる遊びを共に体験し、交流の場をつくり出した。また、他国の人をお迎えするにあたり、伝統的な和室を見学し、障子をつくったり、畳を敷き詰めたりして日本が感じられる空間をつくり出した。これまでつくってきた切り絵は、自分が熱中するものから、人に見せるものへと変わった。また、茶道を体験し、一つ一つの所作や茶を点てる人といただく人双方がつくる空間を味わった。他国の人とのかかわりを通して、自分のくらしを日本という視点で見つめ直した子どもは、「実は、日本のことをよく知らなかった」「もっと日本について知りたい」という思いや願いをもつようになった。

7月には、周さん、ヤニックさん、マリアさんをお招きして「日本夏祭り」を開いた。3人に日本の夏祭りを楽しんでもらい、もっと日本のことを好きになってもらいたいと願ったからである。自分たちと他国の

人、そして他国の人同士がかかわり合う場をつくり出した子どもは、他者とかかわりながら生きている自分を見つめていこう。

5 本時の構想・展開

(1) 本時のねらい

今までつくってきたものやことを振り返ることを通して、自分や仲間の行為に意味や価値を見いだしたり、仲間と考えを交流したりしながら、日本の文化についての見方や考え方をひろげる。

(2) 本時の構想

○ つくっているものやことを共有する

子どもは、切り絵をしたり、茶室やミニチュアをつくったりと、自分がやりたいことに取り組んでいる。日本の文化は何かという視点で自分の暮らしを見つめ直し、自分がつくっているものが日本の文化であったり、和を感じたりできるものだと考えている。しかし、仲間がなぜその行為をしているのか、仲間はどの行為に何をみだしているのかを思考する場が十分

になかったと考える。作文シートに「なぜ、ミニチュアをつくっているのか。つくって何になるのか分からない」、「自己満足で終わるのではないか」と仲間の行為に疑問を投げかけるようなことを書いている子どももいる。本時では、今自分がつくり出しているものやことを紹介し、なぜそのものやことをつくり出しているのかを伝え合う。思いを伝え合うことを通して、自分や仲間の行為に意味や価値を見いだしていく。

○ 日本の文化のとらえを共有する

1学期から他国の方とかかわることを通して、子どもは「日本のことをもっと知ってもらいたい」「日本のよさを伝えたい」と願い、活動してきた。その反面、「実は日本のことをあまり知らない」と感じている子どもがおり、一体何が「日本の文化」なのか、「和」なのかを模索してきた。仲間と共に行為に意味や価値を見いだしていくことで、自分や仲間がとらえる日本の文化にふれ、文化についてのとらえをひろげていく子どもの姿を期待する。

(3) 本時の展開 107・108M/194M (65分)

時間	番号;子どもの活動 ・ ;子どもの姿	○ ; 教師の手立て
30	1 自分のやりたいことに取り組む ・ 切り絵をつくる。 ・ 茶室をつくる。 ・ ミニチュアをつくる。 ・ ヤニックさんとの交流を思い描く。 ・ 折り鶴を折る。	○ 各々の活動に入る前に共有の時間を設ける。 ○ 必要な道具や材料を準備しておく。 ○ 教師もやりたいことに取り組む。
20	2 つくっているものやこと、思いを共有する ・ なぜ切り絵を続けているのかよく分からないと話す。 ・ 自分は切り絵をつくることでだれかとつながっていると感じるから切り絵をつくり続けたいと話す。 ・ 茶室には掛け軸とか屏風とか和を感じるものがたくさんあるから、自分は茶室をつくっていると話す。	○ 実際につくっているものを見せ合う場を設ける。 ○ 子どもが書いた作文シートの記述の一部を提示する。
15	3 感じたことを作文シートに書く ・ なぜミニチュアをつくっているのか最初は分からなかったけれど、話を聞いて何となく理由が分かったような気がすると思う。 ・ ヤニックさんたちに日本のことを紹介するには、自分ももっと知らないといけないと思う。	○ 時間があれば記述したことを基に、思考したことを共有する場を設ける。

6 活動の振り返り

(1) くらしや経験を見つめて

6月から、他国から日本に来た4名の方とかわって来た。それぞれの方の出身地は、中国、ドイツ、コスタリカ、ブルガリアである。日本に来た理由は、留学、仕事、結婚を機に来日して日本に帰化された人と様々である。そんな方たちと交流の場をつくるにあたり、子どもは、「日本のことをもっと知ってほしい」「もっと好きになってほしい」と願い、自分のくらしやこれまでの経験を見つめ直し、日本の文化を感じるものやことを探し始めた。子どもが日本の文化と聞いて思い浮かべたものは、お茶や和室、畳であった。実践社会科と関連させてこれらのルーツを調べた時に、子どもは、「実は日本のことをよく知らなかった」「自分の身の回りは外国のものばかり。日本のものって何だろう」と日本でくらししているにもかかわらず、日本についてよく知らない自分に気付いたり、日本のものという視点で自らのくらしを見つめたりした。また、他国から入ってきているけれど、「日本のもの」という風を受け取れるのは一体なぜなのかという疑問をもち始めた。そんな子どもの思いをとらえ、茶道の先生から来ていただき、茶道を体験したり、和室を見学に行ったりする機会を設定した。このような体験を通して、他国の人との交流会では春からつくり続けてきた切り絵、お茶、琴の演奏、福笑い、折り紙、日本の夏祭りをともに体験した。他国の人からは、「琴の演奏に感動しました」「抹茶がとても美味しい」「切り絵がとても繊細で驚きました」と行為を価値づけていただき、子どもは、喜びと自信を感じていた。



活動を通して、「日本のものやこと」という視点で自分のくらしや経験を見つめ、日本の文化についてのとらえをひろげる子どもの姿が見られた。また、日本の文化を他国の人から意味付けや価値付けてもらうことで自分のくらしや経験を新たな見方や考え方で見つめ直した。

(2) 行為の意図を見つめ直す

2学期に入ると、教室を和室風にしたり、ミニチュアの和室をつくったり、オープンスペースに茶室をつくったりと、和の空間に意識を向けて活動する子どもが多くなった。



日本といえば、和室。和室と言えば畳、障子、襖…と言うけれど、実際にそんな和室で生活した経験をもつ子どもはほとんどいないのである。そんな子どもの姿から、他国の人に紹介する以前に、まずは自分が実際に和の空間を体感したいのだと感じた。

活動を続けていくと、「1学期からずっと同じことをやり続ける意味がよく分からない」「ミニチュアをつくって何になるんだろう」と、だんだんと仲間の行為に対し疑問をもち始めるようになった子どもがいた。そこで、自分の行為の意味や価値について見つめたり、仲間が見いだしている意味や価値を聞いたりする場を設けた。子どもに「何のためにやっているの?」「つくって何になるの?」という子どもの作文シート

の言葉を抜粋して問いかけた。凜太さんは、「和室のミニチュアをつくって、他国のの人に見せたり、プレゼントしたりしたい」と話した。そんな凜太さんの話を聞き、ずっとミニチュアづくりの意図を聞きたいと思っていた真凜さんは「納得した!」と話した。1学期からずっと切り絵をつくり続けてきた柑奈さんは、以前書いた作文シートの記述をもとに「一番は『つながっている』という感じがあるからです。切り絵は今は日本じゃなくてもやっている人はたくさんいます。共通点はなくても、切り絵をしているという点は共通しています。世界の人とともに切り絵をやっている、そんなような気がしてきてしまいます」と話した。以下、仲間の考えを聞いた後に書いた子どもの作文シートである。

今日の話し合いで、ぼくはミニチュアや折り紙をつくっていることに偏見をもっていました。言いたいことは、偏見をもたずに、その目標を聞き、それにチャレンジすればいいのではと分かりました。

祐太郎さんは、仲間の発言を聞いたうえで、仲間の行為に対して否定的にとらえていた自分に気づいた。そして仲間の言葉を聞き、意図をもって活動をつくり続けていくことに価値があるのだと自分で確かにしたのである。

(3) そもそも「和」は何か

日本の文化と聞けば、「和」という言葉が思い浮かぶ。これまでに子どもからも、「和室」「和菓子」「和服」「和食」「和風」という言葉が幾度も聞かれた。他国の人との交流の場をつくり出す際に日本の文化に着目した子どもが、和に着目することは必然だったと言えよう。しかし、なぜ「日本＝和」が思い浮かぶのだろうか。和とは、単に他国の文化と日本の文化を区別する言葉だけではないと考えている。辞書を引けば文字で意味が書いてあるが、それを答えにはしない。体験と思考を連続させながら子ども自身が「和」についてのとらえをつくっていく営みを大切にしたい。そこで、子どもの言動から子どもの志向を感じ取り、伝統的な和室を見学に行ったり、茶道を体験したりする機会を設定した。これまでの体験を通して、子どもは一人一人が「和」についてのとらえをつくっていった。しかし、

そのとらえを共有する場を設けたり、「和」についての知識を蓄えたりすることが不十分だったと考える。子どもが日本独自のものだととらえていた根拠には、「日本ばいから」や「和ばいから」というような感覚的な要素が多分にあり、裏付けとなる知識に出会う場を意図的に設ける必要があったことが課題として挙げられる。このことが、前項で述べた仲間の行為の意図がよく分からない、もしくは分かろうとしない雰囲気につながってしまった要因の一つであると考えられる。だからといって、子どもの感覚的なとらえを蔑ろにはしたくない。共有することを通して、何か共通点が見えてくるはずである。これ以外にも、学級の仲間内だけに留まらない他者からの意味付けや価値付けが肝要になってくる。

これからも交流を続けていく他国の人たち。日本の文化だけを追究していくことが「世界とともに」ではない。今までは発信に重きが置かれていた。今後は、他国の文化を受信することを一層大切にしていきたい。他国の文化を体験することで見えてくる「和」の価値。「和」を体験することで感じる他国の文化の価値。非常に抽象度の高い活動だからこそ、体験と思考の連続や、具体的に立ち返ることを思い描きながら活動を子どもとともに作り続けていきたい。

<メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください>

提案者連絡先 ehirai@juen.ac.jp (平井恵理)